

社会思想社の一側面(上)

田中九一と東大新人会OBの動向

梅田 俊英

はじめに	4 中間派と社会思想社(以上, 本号)
1 社会思想社の創立と初期同人	5 社会思想社の活動
2 田中九一について	6 社会思想社の解散
3 社会思想社の発展	展 望

社会思想社とは、1922年、東大新人会OBによって結成された社会科学研究所である。同年4月には社会問題・政治問題・社会科学の研究雑誌である『社会思想』が創刊された。同誌は、7年余にわたって刊行され、30年1月号を最後に長谷川如是閑らの『批判』に合流した。社会思想社は『マルクス・エンゲルス全集』(改造社)の翻訳・編集などのため残存し、1932年に解散した。

『社会思想』と社会思想社についての研究史をふりかえると、先駆的には増島宏「日本労農党の成立」⁽¹⁾がある。同論文では、社会思想社は日本労農党の「思想的基礎」となると指摘されている。つづいて上記論文をうけて、岡本宏『日本社会主義政党論史序説』⁽²⁾が『社会思想』の誌面をくわしく検討した。結論的には、次のように日本における「中央派」と規定された。

「中央派理論の形成は、日労党成立過程とは一応別のコースで進行し、両者は日労党の結成のなかで結合するのである。中央派の理論形成を行いつつあったのは、雑誌『社会思想』のグループであった」⁽³⁾と述べられている。このグループが「厳密に統一されていたわけではなかった」としながらも、「その小ブルジョアの批評家の立場が全体として、中間派の思想に発展していく」とされている。そして、日本労農党の結成にいたるまでの『社会思想』の発展を、次のように3つの時期に区分されている。

第1期 創刊から1925年8月の無産政党組織準備委員会の発足頃。「理論的に未成熟で全体として右翼的傾向が強かった時期。」

第2期 1925年末の農民労働党の結成と禁止にいたる時期。「左右理論の対立のなかで、運動の局外者として、双方に喧嘩両成敗的論評を展開する時期。」

(1) 『社会労働研究』1962。

(2) 岡本宏『日本社会主義政党論史序説』法律文化社、1968。

(3) 同前、214頁。

第3期 1926年労農党の形成とそれにつづく時期。「両派を批判し、自己の中間的立場を正統派として押しあげようとする段階。」⁽⁴⁾

こうして『社会思想』のグループの中心的部分は、どちらつかずの集団から出発して、局外的中間派の立場を経て、日本労農党の結成におよんで、意識的中央派として結晶し、日労党を単一政党問題の解決者として「ひいきの引き倒し」をするまでに成長した⁽⁵⁾とされるのである。

筆者も、たしかに社会思想社と『社会思想』は中間派を支持したし、その思想的基礎になったことを肯定したい。結局、社会思想社は平貞蔵や三輪寿壯の団体であったといえる。しかし、本論文で述べるような側面もあったことも見ておきたい。従来においても、関係者などから社会思想社員の思想が右から左まで多様なものであったことについては繰り返し述べられている。さらに、中間派を支持していた時期でもそれほど拘束力が強いものではなかったということについても当時から強調されている。本論文ではそういったことだけを述べようとするのではなく、社会思想社の前期と後期ではリーダーシップに変化が見られることを強調したい。平貞蔵らは社会思想社を中間派政治団体化しようとして一時期は成功するものの、長期的中間団体化には失敗したといわねばならない。

日労党支持に至る『社会思想』の無産政党論に限定すれば上記の岡本氏の時期区分は正しいと思われる。しかし、『社会思想』は日労党成立後も無産政党論に発言を続けているのである。そこで『社会思想』と社会思想社の歴史を、日労党成立以後も視野に入れて3つの時期に区切ってみると次のようになる。

第1期 新入会OBとしてばくぜんと社会科学をめぐらした22年3月頃の創立から26年7月の平による「中間派支持宣言」まで。この時期を岡本氏は前述のように3つの時期に区分されている。しかし、この時期をあえて3期に分けるほどのことはなく、結局中間派を組織的に支持していく時期だと考えられる。

第2期 26年末公式に日労党支持を打ち出した時期から、28年12月結成の日本大衆党が翌年1月の「清党事件」で分裂するまで。この時期に日労党を中心に右派の日本農民党から労農派まで含めた単一無産政党結成過程について論評している。そして、日本大衆党成立を歓迎している。

第3期 「清党事件」で日本大衆党が分裂したことにひどく落胆し、無産政党運動に関心を失っていき、同人のなかでも思想的落差がはっきりとしてくる。こうして、去就の迷いが出て『社会思想』は30年5月改題の長谷川如是閑の『批判』に合流する。その後は活動は不活発となって、32年に解散する。

従来の研究は、『社会思想』誌面の検討が中心である。もちろん、雑誌は第1の資料ではあるが、彼等の書き残した原資料などを使って社会思想社という団体の組織的な実態をここでは明らかにしたい。一例を挙げれば、中間派の「思想的基礎」になったということは組織的にはどのようなことなのかを検討の対象にするわけである。また、従来の研究では、社会思想社といえば平貞蔵・三輪

(4) 同前, 214~215頁。

(5) 同前, 218頁。

寿壮・細野三千雄・河野密ら中間派の理論家・政治家の動向を探るのが一般的である。そのことを肯定した上で、本論文では「田中九一」というこれまであまり注目されてこなかった人物に多く言及したいと思う。田中は誌上でそれほど大論文を書いた人物ではなく、コンスタントに海外ニュースなどを報道した人物である。しかし、社会思想社を組織的に見ると、田中はかなり重要な役割を果たした人物であったと筆者は理解している。

ところで、本論文では、社会思想社の歴史を無産政党論の領域に限定して論じようとはしない。社会問題、社会思想について研究し論じあう「知的共同体」⁽⁶⁾の形成において『社会思想』グループの果たした役割を探ってみることが大きな課題となる。

1 社会思想社の創立と初期同人

はじめに創立の経緯についてふれよう。1921年11月30日、「我等は新人会を今後大学内の思想団体として存続せしめる事を茲に宣言する」⁽⁷⁾と、東大新人会は現役学生の学内団体として再編されることになった。これでOBが排除されることとなった。ところが、卒業間際に新人会に加盟したのももあり、卒業生の何かの団体をつくろうと社会思想社が創立されることになったのである。卒業生がいるとリーダーシップをとりにくいと赤松たちはOB排除を考えたのであろう。平貞蔵は「新人会の組織変更が一部会員の策動によるものと推測される点もあった。それでは、ということで気の合ったものだけで集まったのが社会思想社である。一部の策動があったらうとするのは推測に過ぎない」⁽⁸⁾と矛盾したことを述べている。しかし、赤松らがOB排除を意図したことは間違いないであろう。それは、「大正10年秋在学生と卒業生とが表面上の関係を絶つ事になり、其の年の新人会3周年記念日を名残として我々は新人会員ではなくなつた。……各卒業生は新人会をその揺籃として各方面に活躍するが良いだらうと言ふ其の時の赤松君等議論には渋々従つた」⁽⁹⁾という記事から想像できよう。

とはいえ、卒業生の方にも新人会創設者の赤松・石渡春雄・宮崎龍介に「いくらか批判的な気持ち」があった⁽¹⁰⁾。そこで、「蛸山や石浜なんかは東大を卒業する直前にはいったんだし、卒業したとたんはいったのもいる。せっかくこれからやろうと思っているときでもあり、お互いに残念だと

(6) 「近代日本の知識人」(丸山真男『後衛の位置から』未来社、1982、所収)で、丸山は近代日本において「知識人が職場のちがいをこえてひとつの知的共同体を構成しているという意識」が高まった時期が3度あったと述べている。第1は、明治維新からほぼ明治20年頃、第2は、1920年代以後の「思想問題」の登場の時期、第3は敗戦直後の「悔恨共同体」の形成である。本稿に直接関係するのはもちろん、マルクス主義が衝撃を与えて成立した第2の知的共同体である。

(7) 『ナロオド』6号。

(8) 『三輪寿壮の生涯』1966、196頁。スミス『新人会の研究』(東京大学出版会、1978)の註で、策動した会員がだれかを平から聞いたところ「平はそれは赤松だと筆者に語ったが、赤松がそんなにずい男だとは信じがたい」と述べている(265頁)。

(9) 『社会思想』25年1月号「編輯室から」。

(10) 前掲『三輪寿壮の生涯』196頁。

いう気持ちがある。それじゃあ、ひとつ気の合った卒業生だけ、これからやれるものが会をつくろうじゃないかというのでつくったのが社会思想社だった⁽¹¹⁾という。

社会思想社の創立の年月日は正確にはわからない。新人会機関誌『ナロオド』22年4月号(最終号)に「嘗て我会の会員であつた先輩の中(ママ)志を共にする一部分の人々のみによつて社会思想社がつくられた。活動の第一着手として、雑誌『社会思想』が4月より発刊せられると。」とあり、前月号にはまったくふれられていないことから、同社の創立は1922年2月末か3月はじめのことだろう。『社会思想』創刊号の印刷納本が3月30日付なので、原稿準備の関係等で3月半ば以後はあり得ない。

社会思想社は、東京月島の平貞蔵宅に置かれた。印刷所は同じ月島の「第二印刷所」(第二インターのもじり)。この印刷所は、「新人会の会員だった河合秀夫の出資になる小さいものだった。あとで嘉治や蠟山にも負担をかけた」⁽¹²⁾。

創立期の同人は以下の通りである。東大卒業年度と略歴をみてみよう⁽¹³⁾。

石浜知行 1920年卒。九州帝大教授だったが、28年、三・一五事件後「左傾教授」として追放された。

蠟山政道 20年卒。政治学者で東大教授。戦後は民主社会党顧問。

波多野鼎 20年卒。満鉄東亜経済調査局員。九州大学教授などを歴任。戦後は右派社会党の理論的リーダーとなる。

細野三千雄 20年卒。三輪寿壮と共に中央法律相談所の所員となる。日本労農党ができると会計を担当。戦後、右派社会党に属す。

河村又介 19年卒。戦後、43年から63年まで最高裁判事をつとめる。

嘉治隆一 20年卒。満鉄東亜経済調査局に入社。33年「共産党シンパ」として検挙された。翌年東京朝日新聞社に入社。

田中九一 21年卒。満鉄東亜経済調査局に入社。42年「満鉄調査部事件」で検挙された。戦後、東北学院大学教授。詳しくは次章参照。

平貞蔵 20年卒。22年から33年まで法政大学教授。

後藤信夫 京都大学卒。本名、松方(義)三郎。元老松方正義の息子。賀川豊彦の影響で社会運動に接近。

佐々弘雄 20年卒。九州大学教授。28年、石浜と共に追放された。34年朝日新聞社入社。

三輪寿壮 20年卒。日本労農党書記長となった。戦後、右派社会党に属す。

新明正道 21年卒。関西学院大学・東北大学教授。戦後、日本社会学会会長などを歴任。

以上のように、主として東大1920年卒業組によって、1922年に社会思想社が結成された。22年4月から社会主義研究雑誌『社会思想』が発刊され、『改造』、『我等』などとならんで社会主義、マルクス主義研究雑誌の一翼を占めるようになる。発行部数は、創刊時は不明だが、1928年日労党

(11) 『平貞蔵の生涯』記念事業会、昭和55年、133頁。

(12) 前掲『三輪寿壮の生涯』197頁、平貞蔵「社会思想社結成の頃」。

(13) NSクラブ編『東京帝大新人会員の足跡』1987など参照。

の「準機関誌」になった頃は「毎号約2000部」⁽¹⁴⁾とある。創刊期の『プロレタリア科学』は6000部出ている。それと比べるとそれほど多くはない。直販体制を持っていなかったこと、「近頃、『社会思想』に対してもつと学生大衆に呼びかけて呉れ、との注文、乃至は勧告が来る」⁽¹⁵⁾とあるように、直接読者に訴えかける努力がそれほどなされなかったためだろう。後述するように、有島武郎の遺産を入手できたことに10年近くのおんびり刊行できた理由の一つがあろう。

ここで『社会思想』の「編輯言」(同人雑誌だった関係でこの「編輯言」から同人の動向がよく分かる)から分かる編集の中心人物の推移をまとめておこう。まず、社会思想社の所在地についてまとめよう。

22年4月～ 平貞蔵宅 東京市京橋区月島東仲通9-3
 23年2月～ 三輪寿壮宅 東京市日本橋区蛸殻町3-8
 23年11月～ 三輪寿壮宅 東京府下西巢鴨町庚申塚385
 24年12月～ 細野三千雄宅 東京市下谷区上野桜木町45
 27年2月～ 細野三千雄宅 東京市麹町区四番町八番地
 27年6月～ 細野三千雄宅 東京市四谷区塩町1-31
 27年9月～ 東京市赤坂区溜池町1溜池ビル

発行人は次のようである。

22年4月～ 平貞蔵 23年2月～ 三輪寿壮 28年7月～ 丸岡重堯
 29年5月～ 荘原達

「編輯言」執筆者の初出は次のようである。無署名のものはあげていない。

23年7月 河西太一郎 24年8月 田中九一 24年9月 平貞蔵 24年10月 矢木沢善次
 24年11月 三輪寿壮 25年2月 友岡久雄 25年4月 嘉治隆一 26年11月 細野三千雄
 28年2月 丸岡重堯 28年8月 荘原達(11月号から荘原が「編集事務取扱」)

22年4月創刊からの「編輯言」は無署名だが、ほとんど平貞蔵が執筆したはずである。

以上から編集体制を大きく区分すると、『社会思想』は2期に分かれるようである。つまり、平・三輪・細野の3人がリーダーシップをとっていた前期(22年4月～28年初め)と丸岡・荘原によって編集された後期(30年1月まで)である。

社会思想社は定期的に雑誌を出したほか、研究会や講演会を頻繁に開催した。例えば、22年10月、京都、大阪、神戸、和歌山で「社会思想社講演会」⁽¹⁶⁾を開いている。講師は「嵯山政道 長谷川如是閑 波多野鼎 新居格 富田碎花 千葉雄二郎(ママ) 大山郁夫 恒藤恭 小岩井浄 麻生久 佐野学 新明正道」であった。このうち、如是閑・新居・富田・大山・恒藤の5人は我等社に關係している人である。両社は思想的ベースでほとんど同じだったといえる。京都は400人、大阪500人、神戸は200人、和歌山100人と⁽¹⁷⁾、聴衆はそれほど多くはないが、地方講演旅行の形式でも

(14) 『出版警察報』昭和3年12月号。これに『社会思想』が登場するのは同号が初出。

(15) 『社会思想』28年6月号。

(16) 『社会思想』22年10月号。

(17) 『社会思想』22年12月号。

早い時期に当たるものである。明治社会主義においてももちろん講演会は行われたが、例えば片山潜がキングスレー館で行うとか、平民社で行われるとかした。地方には「伝導行商」のような形式で行われた。地方講演会は新人会が地方支部を作るなかで始めていったもの⁽¹⁸⁾で、新人会OBの彼等が地方講演会の形式をとるのは自然である。大正期から昭和期にかけてプロ科などプロレタリア文化団体が精力的に地方講演旅行を行うようになる。

以上の動向から初期社会思想社の中心人物についてまとめよう。中心はもちろん平貞蔵である。河村又介、石浜知行、佐々弘雄は渡欧中⁽¹⁹⁾であるし、新明正道は関西在住で、蠟山政道は帝大に助手として残ることになった⁽²⁰⁾。この状況のなかで平・三輪・細野の3人が中心となる。27年までは、いわば『社会思想』はこの3人の同人雑誌だったといえる。そのなかにあって、初期同人の一人・田中九一の存在は若干特異なものであった。卒業後に新人会に加入しており、後述するように、社会思想社同人になった時にはすでに職に就いていた。そのため当初は実務的には中心にはなり得なかったが、雑誌にはコンスタントに執筆しており、徐々に発言権を増していくのである。

2 田中九一について

前述のように、田中九一は初期の誌面からコンスタントに執筆を続けていた。当時、満鉄の東亜経済調査局（東京）に就職して、『インプレコール』など海外の資料が自由に読める立場にあった⁽²¹⁾。それを利用して田中は『社会思想』に「海外解放運動消息」を書き続けている。ここで本論文のキーパーソンである田中九一の経歴を若干くわしく紹介しよう。『東京帝大新人会研究ノート』に田中九一の聞き取りが公表された。これをまとめてみよう⁽²²⁾。この聞き取りは当時慶大大学院生だった宗片氏によって1980年12月22日、桑名の田中氏宅で行われた。筆者が桑名でお会いしたのは81年8月10日なので、田中氏の身边はほぼ同じ状況だと言える。

前述のように田中は、東大卒業と同時に満鉄東亜調査局に入所した。1936年6月から「支那経済及北方調査」の主査に任ぜられている⁽²³⁾。つまり、ソ連経済の調査を担当したのである。1943年10月29日には満鉄調査部事件の二次検挙で、石堂清倫らとともに田中も逮捕された⁽²⁴⁾。翌年釈放され、戦争終了と共に4年間ソ連の鉄道管理局で満州経済を調査した。ところがソ連の経済を内偵した廉でスパイ行為を働いたとして逮捕され、13年の強制労働の刑を受け、シベリアで7年間の「奴隷労働」についた。こうして、日ソ国交の回復した1956年にやっと許されて日本に帰国する。

(18) 梅田俊英「米騒動後の知識人の動向」『大原社会問題研究所雑誌』372号参照。

(19) 『社会思想』22年6月号。

(20) 『社会思想』22年9月号。

(21) 1981年8月10日、田中九一より聞き取り。

(22) 慶應義塾大学中村勝範研究会『東京帝大新人会研究ノート』16、平成6年、宗片邦子聞き取り「田中九一氏に聴く」昭和55年。

(23) 野々村一雄『回想 満鉄調査部』勁草書房、1986、36頁。

(24) 同前、252頁。

60歳のことである。帰国の翌年、愛知大学の講師となり、さらに翌年には東北学院大学教授となる。1979年には定年退職となった。宗片氏および筆者による聞き取りはその直後ということになる。

次に田中九一の思想の遍歴について述べよう。『社会思想』で田中は労農ロシアについてたくさん執筆しているが、これについて、田中は「社会主義のお手本だとその頃思っておったんです。」⁽²⁵⁾と述べる。その思想は、「主として河上先生の社会問題研究の感化」⁽²⁶⁾だった。とはいえ、次のように実践行動に入る程ではなかった。

「宗片 非合法の日本共産党が出来たというのをご存知になったときに、どう考えられましたか。

田中 そうですね、勇敢な人たちだなあと安心して(感心?...引用者)していたんです。

宗片 だけど自分はそのまではいこうとは思わない?

田中 そうです。

宗片 何故先生はそこまでいこうとは思わなかったのですか。

田中 まあ命が惜しかったんですね。

宗片 関東大震災のときの社会主義者の暗殺などは - ?

田中 非常に驚いて、権力はけしからんと。

宗片 福本主義なんかは - ?

田中 福本和夫さんは河上先生を批評したり、河上さん自身が福本氏の批評は正しいと俺の方が悪かったと書いていますね。

宗片 先生は河上先生を一番尊敬してらしたわけですか。

田中 そうですね。

宗片 それでは批判されると - ?

田中 いや福本さんの批判にもいいところがあった。河上さんは唯物論を唱えながら、本当の唯物主義ではないと、そういうことを言っていましたかね、河上さんもその通りだと、自己批判をやってましたね。だからその限りでは福本さんにも感心しておったです。あれは非常にわかりやすい面白い文章でね。」⁽²⁷⁾

このやりとりに近代日本の正義派左翼知識人の典型的な意識状況をうかがうことができるのではないだろうか。田中は「東京帝大在学中クロボトキン著『青年に訴ふ』河上筆著『社会問題研究』及帝大新人会主催森戸辰男の講演等の影響を受け、社会問題に関心を抱きたること」⁽²⁸⁾という。20年代前半においてはクロボトキンの影響が強かったことを思うと、田中の左翼思想への接近は代表的な例のひとつであろう。

田中は東大卒業後長く満鉄と関わりあうが、それについての考えを探ってみよう。もし反体制が勝利したらどうするかという問いに「その時に自分の属している機関を守ろうとは思わなかったな」

(25) 前掲『研究ノート』191頁。

(26) 同前、192頁。

(27) 同前、199～200頁。

(28) 関東憲兵隊司令部編『在満日系共産主義運動』昭和19年、102頁。

(29) と答え、「自分が搾取しているとは思わないが自分の属している会社が搾取しているとは思ったですね」(30) と述べている。満州に渡ったあとも田中は左翼思想にふれている。特高のバイアスのかかった文だが、満鉄調査部事件について引用しよう。

「昭和6年の満州事変を契機として共産主義より完全に転向し、左翼文献は倉庫に格納し、左翼分子との交際なしと主張、主義信奉を否認して居たが押収物件検討中偶々平館利雄、川崎巳三郎共訳『ソヴェット配給組織論』を平館より寄贈を受け而も研究の跡明瞭なりしを発見し、之を提示所感を求めたところ愕然として態度を更め、未だ共産主義思想を信奉しあるを自供するに至つた」(31)

満鉄調査部事件で検挙されて「転向」を強要されても田中の思想は変わらなかった。しかし、ソ連に抑留されて強制労働の生活のなかで、思想を変える。田中は「社会主義そのものについては別に信念を変えなかったですが、スターリンのやり方がわるいと、スターリンの周辺がわるいと思いました。スターリンが死んだときはほっとしましたよ。……その頃はもう若いときの様にソ連が社会主義のお手本だというこの考え方はなくなったね。社会主義というのは、もっと理想的なものは、自由の社会主義でなくてはならん、人権を侵害するようなのは社会主義の中でも、これは一番下等な社会主義だとそう思ったですね」(32) と述べている。ソ連の実態を身に体験して、戦後は社会的、政治的実践行動には入らず「理想主義者」として静かに暮らしたのである。そして、1995年1月29日、96歳で逝去された(33)。

3 社会思想社の発展

前述のように、23年末には本社が月島の平方から西巢鴨の三輪寿壮方に移転(34)している。関東大震災で被災したためである。こうして、細野三千雄(自由法律相談所を開く)・三輪寿壮に中心が移っていく。社会思想社も発展の時期を迎え、24年頃までに同人は倍加した。新規加入の同人とその略歴を挙げよう(35)。

林 要 20年卒。大原社会問題研究所を経て、23年同志社大学教授。36年同大学を追放となり、執筆禁止処分を受ける。戦後愛知大学教授などを歴任。

細迫兼光 22年卒。26年労農党書記長。29年、新労農党書記長となったが、同党解消派に属した。戦後は社会党に属し、社共中心の統一戦線結成に努力した。

友岡久雄 23年卒。戦後まで法政大学教授。久留間鮫造、山村喬とともに、大原社会問題研究所が法政大学に移管される努力をした。

(29) 前掲『研究ノート』202頁。

(30) 同前、203頁。

(31) 前掲『在満日系共産主義運動』653頁。

(32) 前掲『研究ノート』208頁。

(33) 御遺族より。

(34) 『社会思想』23年11月号。

(35) 『社会思想』24年11月号。

千葉雄次郎 22年卒。朝日新聞社に入社。戦後、東大新聞研究所所長などを歴任。

河西太一郎 20年卒。大原社会問題研究所をへて23年立教大学教授。

河合秀夫 21年卒。農学部出身。27年4月、社会思想社退社。帰郷し、三重などで農民運動を指導した。

榑崎 輝 23年卒。プハーリンの『史的唯物論』を訳す。31年死亡。

矢木沢善次 京都大学卒。有島武郎と懇意で、有島財団より財政援助のきっかけを作る。

山村 喬 京都大学卒。戦前から戦後にかけて法政大学教授。マルクス『哲学の貧困』(1950)を訳す。

丸岡重堯 早稲田大学卒。大原社研助手を経て東洋経済新報社記者となったが、社会思想社の専属スタッフをつとめた。同社によって社会経済研究所が作られると、その中心となったが、29年死亡。

松沢兼人 21年卒。大阪市役所に勤め、大阪労働学校主事となる。26年日本労農党にはいる。戦後、社会党衆議院議員などを歴任。

小岩井浄 22年卒。第一次共産党に入党。新労農党解消派に属した。戦後愛知大学学長などを務めた。

河野 密 22年卒。日本労農党創立発起人となる。戦後は右派社会党に属した。

金 俊淵 20年卒。卒業後、ソウルに帰る。28年共産党に関係して検挙された。戦後大統領選挙に出たが落選した。

住谷悦治 22年卒。大原社会問題研究所を経て、27年同志社大学教授。戦後は、夕刊京都新聞社社長を経て、同志社大学教授、63年同総長を歴任。

その後も、『社会思想』同人は増えている。大原社会問題研究所に27年頃と思われる「同人名簿」が残されているので紹介しよう。

「同人住所氏名

外遊中 伊藤武雄

福岡市土手町19 石浜知行

東京市外杉並町高円寺548 嘉治隆一

東京市外高井戸町高井戸式 河西太一郎

仙台市琵琶首新町17 河村又介

大阪市北区天満橋筋3丁目38 小岩井浄

東京市外大久保町東大久保306 河野 密

大阪市天王寺町伶人町大原研究所内 後藤貞治

外遊中 後藤信夫

福岡市地行町7番丁80 佐々弘雄

尼ヶ崎市大物町14 阪本 勝

東京市麴町区土手3番町19 沢田清兵衛

仙台市木町末無11 新明正道

東京市外高井戸町大宮前327 莊原 達

群馬県群馬郡国府村東国分（帰省中） 住谷悦治
静岡県志太郡稲葉村役場（出張中） 杉野忠夫
長岡市神明町裁判所前通角 宗 道太
東京市外中野町打越2078 田中九一
" 杉並町高円寺918 平 貞蔵
" 蒲田町御園蒲田旅館 千葉雄次郎
" 中野町千光前3007 友岡久雄
" 杉並町高円寺512 東井金平
山口県美祢郡岩永村（帰省中） 檜崎 輝
京都市下鴨北園町111 林 要
福岡市荒戸町5番丁270 波多野鼎
仙台市木町末無11 服部英太郎
東京市芝区今入町15 労働農民党本部 細迫兼光
" 四谷区塩町1-31 細野三千雄
" 高田町雑司が谷525 丸岡重亮
神戸市外原田312 松沢兼人
東京市外中野町東中野1613 三輪寿壮
朝鮮京城帝国大学法文学部研究室 三宅廉之助
東京市外杉並町高円寺219 山村 喬
高崎市歌川町1番地（帰朝後） 蠟山政道
消息不明 金 俊淵
東京市外中野町桃園町3343 八木沢善次

蠟山は27年夏イギリスから帰国している⁽³⁶⁾ので、この名簿は27年春頃のものであろう。新同人は、伊藤武雄（20年卒 満鉄入社 戦後日中交流運動に努力 鈴江言一を嘉治ら社会思想社同人に紹介）・後藤貞治（東亜同文書院卒 大原社会問題研究所所員）・阪本勝（23年卒 兵庫県会議員 戦後、兵庫県知事）・沢田清兵衛（22年卒 30年頃死亡⁽³⁷⁾）・莊原達（23年卒 如是閣の「翁の会」の常連 戦後、日本社会党本部総務部長ほかを歴任）・杉野忠夫（25年卒 京大助手で、学連事件では家宅捜索を受ける）・宗道太（28年頃死亡。改造社版『マル・エン全集』の訳者で、エンゲルス『仏独二国に於ける農民問題』を訳す。ローザ『資本蓄積論』、カウツキーの『フランス革命時代に於ける階級対立』の訳者）・東井金平（慶応大学経済学部卒 『消費統制と市町村』（神戸市役所 1938）を執筆。戦後、『米国農政問題研究』（1949）、『欧米における日本農業の研究』（1956）を執筆。農林省農業総合研究所所員をつとめた。）・服部英太郎（23年卒 社会政策学者 戦後、東北大学教授）・三宅廉之助（不明）の10人である。前述のように、河合秀夫がこの頃退社しているので、社会思想社社員の総勢は37人となる。

(36) 『社会思想』28年2月号。

(37) 前掲、スミス『新人会の研究』。

これ以後も同人は増加した。平貞蔵によれば、次の人々が新規同人となっている⁽³⁸⁾。

笠信太郎・市村今朝蔵・伊藤好道・上条愛一・山中篤太郎・岸本誠二郎・平井鎮夫・来島習・渡辺佐平・横川次郎・松本重治

前述のような新規同人の加盟で、社会思想社の思想傾向に大きな幅が出てきた。小岩井は第一次共産党に関係している。細迫はのちに新労農党書記長をつとめる。中間派に行くのは細野・三輪・河野の3人である。平は政治活動はしなかったが、もちろん中間派を支持した。ところが同じく、政治活動はしなかった田中、林、住谷、友岡、丸岡、山村らは左派的立場を支持する。たとえば田中本人からは「共産党ファンだった」と聞いた。「『マルクス主義』の題名を以て『階級戦』が復活したことは何んと言つても我国の正統マルキシズムの燈明台に再び火が点ぜられたもので、非常に歓迎しい。健闘が祈られる」⁽³⁹⁾という編輯後記は無署名だが田中の可能性は高い。

第1期の社会思想社の性格は次の平の編輯後記によく現れている。

「社会思想社を一つの綱領を掲げた団体にするか、それとも当分だいたい思想を同じくして信頼し合へる者の団体とするに止めるか、と言ふ議論がいつも席上で行はれた。結局後者の議論に従ふ事になつたのだが、いつ迄もさうばかりでも居れまい。きわめて私的な団体から主義綱領を中心とした大きな団^(ママ)になる日が必ず来るだらう。然し日本自体の研究がもつと行はれて、運動の傾向がもつと具体的になる迄は我々のやうなセケ(ク?)ションも存在の意義を有すと信ずる。今の所、同人は同種類の団体に二重に籍を置かぬ事になっているが異種異質の団体には関係する。」⁽⁴⁰⁾

つまり、第1期の社会思想社員のなかには「きわめて私的な思想団体」か「綱領を掲げた政治団体」か、の考え方の違いがあったのである。明らかに細野・三輪・平らは後者を支持し、その他の人は、前者を支持したであろう。24年には「運動の傾向がもつと具体的」になった。23年に山本内閣の普選実施声明があり、急速に無産政党政結成の気運が高まっていく。24年には政治研究会が結成されて、具体的な無産政党政結成準備に入っている。その情勢をみて、平は社会思想社を無産政党政運動にコミットさせていこうと考え始めたようである。

24年4月5日、「新同人も参加して東京帝大構内で我社の第一回総会を開いた。会する者三輪、細野、嘉治、蟬山、平、田中、千葉、木沢、丸岡、波多野、林、住谷、山村、小岩井、河野、新明、松沢の17名、細迫、河西の2人は要事不参。」⁽⁴¹⁾このように、初めて「総会」を開催して、「きわめて私的な団体」から脱皮し始めた。この総会で次のような社会思想社規約が決定されている⁽⁴²⁾。

「社会思想社 規約(大正13年4月5日決定)」

第1条 社の大綱は同人大会によって決す

定期大会は毎年1回。4月上旬開催す

定期大会の開催地は前年の定期大会に於て決す

(38) 前掲、『三輪寿社の生涯』、207頁。

(39) 『社会思想』24年7月号。

(40) 『社会思想』25年1月号。

(41) 『社会思想』24年6月号。

(42) 大原社会問題研究所所蔵原資料。

臨時大会は同人半数以上の要求ありたる時に開催す

臨時大会の開催地は臨機適宜に決す

大会の議案は少くとも半カ月前に同人に通知する事を要す

第2条 東京付近及び東京以北在住の同人を以て関東支部を設く

京阪神付近及びそれより以西在住の同人を以て関西支部を設く

支部は社の他の機関と抵触せざる範囲内に於て各自治とす

支部に代表者1名を置く

支部代表者は支部と支部若くは本部との連絡、支部内の庶務の任に当る

支部代表者の選出は各支部に於てす

第3条 社の事業を行ふ為に調査部、出版部、講演部、労働法律部、労働教育部、庶務部の6事業部を設く

調査部は資料、統計、内外新聞雑誌図書を蒐集す

出版部は雑誌「社会思想」、パンフレット、叢書を刊行す

講演部は適當の機会ある時、又は地方の招致ある時講演会を開催す

労働法律部は労働者の訴訟費用の立替受任、新判例を得る必要ある時は訴訟費用負担、受任、労働法制の調査をなす

労働教育部は労働教育に関する研究及び実情を調査す

庶務部は大会の召集、文書の整備、会計、支部と本部との連絡、雑誌の広告、販売、その他の庶務を行ふ

第4条

各事業部に1名乃至2名の責任者を設く

各事業部の責任者、各支部代表者を役員とし、役員を以て役員会を組織す

役員会は大会の決議を執行し又社の常務の決議を執行す

役員の任期は1年とす

第5条

新同人は同人2名以上の推薦により年次大会の同意を得て決し、除名手続も亦之に準ず」

以上のように、「大会」の位置が非常に高くされた。同人加盟には「年次大会」の同意が必要で、「除名」もあり得た。ここまできると、単にマルクス主義研究団体とは言いがたい。明らかに社会運動団体を目指すようになったといえる。

「大会決定事項抜粋」⁽⁴³⁾には、「大正13年4月決」の次のような役員名の記載がある。

「調査部 田中、講演部 千葉、庶務部 細野、出版部 嘉治、波多野

労法部 三輪、小岩井 労教部 平、河野

関東支部代表 田中

関西支部代表 波多野」

以上のように、田中九一の位置が高い。前述のように、田中はかなり左派寄りの人物で、「然し

(43) 同前。

メーデーは断じてお祭り騒ではない。それは全世界の凡ての人を反省せしむる日だ。真実の前に目を開かしむる日だ。真実の声に耳を掩ふ者に対して、誰が真の生産者なるかを行為を以て示す日であるのだ⁽⁴⁴⁾という文章を書く人である。新人会の一部出身者にありがちのヒューマニズム的「叫び」を見て取ることができる。そのためこの頃の社会思想社は「右も左もだめ」という典型的な中間派政治団体に簡単にはなることができなかったのである。

以上、第1期の社会思想社をみてきた。この時期は東大新人会OBが中心となって、マルクス主義中心の研究団体として出発し、規約を持つ実践的な団体に变化し始めた時期であるといえよう。

4 中間派と社会思想社

1926年3月労働農民党が左派を除いて結成されたが、その年のうちに、左派による門戸開放要求が起こった。日本農民組合がそれに同調すると右派の総同盟は脱退し、12月には大山郁夫を委員長に左派の労農党が結成された。ところが、左右どちらにも批判的な総同盟と日農の一部の人たちによって、同月日本労農党が結成された。

社会思想社はこの時期に日本労農党を公式に支持することになる。26年7月号の巻頭言で平が「一つの反省と展望」を書いて、次のように中間派を支持することを示唆した。

「今自から政治行動は認の上に立て、同じく是認の上に立てる同一陣営内を見るに、右翼と左翼の対立紛争の無意義なるを感ずる所多く、不可解の点亦なきに非ず。右翼左翼の経済行動の上に於ける主張と行動との矛盾の問題は兎も角として、政治行動の上に於ける両翼中の一部の言動には寒心に堪えざるものも少くない。しかも又一部には望まじき機運も醸成されつつあるを見る。必要は常に問題を解決するであらう。」

このように明瞭に平は左右両翼批判の立場にたった。そして、26年12月、日本労農党が結成されると、さっそく「単一無産政党已にならず、ならずして多くの併存を見たる以上、吾々は日本労農党の出現を喜ばざるを得ない⁽⁴⁵⁾と支持を表明している。こうして、労農党と日本労農党の書記長はどちらも社会思想社の同人(細迫と細野)ということとなった。

しかし、中間派支持の主流派に対して、関東大震災以後の「方向転換論」の動向について次のように述べる田中九一とでは、明らかに考え方の違いがある。田中は「震災3周年...あの時の多くの同胞の痛ましい犠牲と、我国民の大部分があの時示したる社会主義思想に対する無理解とである。...これではならぬ、とは心ある者の等しく痛感した所である。社会主義的思想の一般化の必要は、解放運動に関心する凡ての者の合い言葉の如くなつてゐた。震災後急に方向転換が叫ばれ、「現実主義」が高唱せられるに至つたのも、主として右の如き動機からであつたやうに思ふ。然るに今日の有様は果してどうであらうか。「現実主義」を説く人々の一部には、震災当時の一般的無理解を更に強めるやうな言動がないと言ひ得るであらうか⁽⁴⁶⁾と述べて、はっきりと右傾化に反対した。

(44) 『社会思想』25年5月号。

(45) 『社会思想』27年1月号「時観 労農総連合と日本労農党」

(46) 『社会思想』26年9月号。

中間派支持宣言を出した『社会思想』は、さっそく『マルクス主義』から西雅雄によって「中央派」と批判された⁽⁴⁷⁾。論点は評議会の成立について河野密が「分裂否定」の立場に立ったのに対し、西雅雄は「分裂不可避」と応じたところにある。その見解の相違の根底には「柔軟性と原則性」というテーマがあった。もちろん『マルクス主義』側は「原則あつての妥協」を強調して『社会思想』を批判するのである。結局、『マルクス主義』の批判は、社会思想社のような「中央派がその本質に於いて右翼と同一」であり、「ブルジョアジーに対する必要のため」存在するとした生硬なものであった。主として、嘉治隆一・河野密・平貞蔵が批判の対象となっている。

この頃の『マルクス主義』は福本和夫の影響が強く出てくる時期で、社会思想社の人々は、田中も含めてこぞって福本イズムには批判的だった。労農党書記長の細迫もそうである。「現下の無産階級雑誌に於ては『マルクス主義』を始めとして、残らずと云つてよい程多くのものが、啓蒙的能力を失つて、素人たる大衆には何が何やらサツパリ判らない戦術上の、玄人間の論議で満たされている。...上層に於ける理論闘争の風雲のみ徒に急にして、大地にはカラツ風さへ送つてゐない.....私は先年の『赤旗』といった調子の雑誌の必要を近頃ヒシヒシと感ずるものである」と述べている⁽⁴⁸⁾。細迫は社会思想社に共感を失っていない。

こうして、27年2月号には「社告」が掲げられる。

「即ち我等は事情の許す限り、力を尽くして、現実に發育しつつある無産大衆的政党を支持せんとするものである。我等は固より単一無産政党の確立を主張し来つたものにして今後と雖も何等異なる所はない。唯最も適當とする政党に拠りてこの持論を具体化せんとするものである。」

ここで社会思想社は政治団体化したことになる。1927年3月号には「憤起せよ社会思想を支持せよ」という「日本労働組合同盟兵庫県青年前衛隊」の声明が掲載されている。このような労農団体の生の資料が掲載されることは労農雑誌にはふつうのことであるが、『社会思想』に掲載されたのは先にも後にもこれが唯一である。同声明は次のように述べている。

「聞く社会思想は過去の高等批評家的態度を捨てて、日本労農党を理論的に支持するといふことに決定したさうである。吾等は早くより之を望んでゐた。

批評より主張に躍進した社会思想社同人諸氏に感謝するとともに、又将来に多大の希望を有する者である。

吾等日本労農党支持者は、社会思想こそ真に吾等の理論的同志であり、指南書であると信ずる。」

この声明は社員の誰かが意図的に書かせたものであろうが、『社会思想』は明瞭に「批評」から「主張」へと中間派支持の政治団体に転換しようとした。ところが、前述のように労農党・日労党の双方の書記長が同人という状況で社員の間で混乱が起こったようで、27年1月に臨時大会が開催された。この大会で、「政党に対する態度」が決定され、「日本労農党を通じて単一無産政党主義

(47) 『マルクス主義』26年9月号・10月号 西雅雄「我が国に於ける中央派の一典型 - 『社会思想』の態度を評す」。

(48) 『社会思想』27年1月号 細迫「現下の日本無産階級運動に対する二提議」。

(大左翼主義)の立場を支持すること。此態度を宣言すること」⁽⁴⁹⁾とはっきりと日労党支持が申し合わされた。しかし、細野が「あゝは決定しても同人全部が即刻街頭に狂奔するわけではなく、個人的事情により当分理論的方面のみを受持つ人もあるのは勿論です」⁽⁵⁰⁾と述べているように、それほど拘束力の強いものではなかったようである。林要氏も「別に拘束されなかった」⁽⁵¹⁾と述べている。社会思想社は以後、単一無産政党結成運動に期待を寄せていく。それは一応28年12月、日本大衆党となって実現する。

ところで、28年2月号付録で「27年テーゼ」が「福本主義を清算せよ」として田中九一によって翻訳された。丸岡が「2月号別冊付録「福本主義を清算せよ」は例の昨夏のロシアEKKI幹部会の決議の全文であるが、既にその要略が発表されて問題になつてみた矢先とて、いまその全文の邦訳の発表を得てプロ陣営内に一大センセーションを巻き起こしたらしく、其他総選挙の資料等のあつてか前号注文殺到忽ちにして売切の盛況を呈した」⁽⁵²⁾と述べているように、相当反響があった。田中氏は「共産党の雑誌のようだ」とまわりから冷やかされたという⁽⁵³⁾。もちろん「27年テーゼ」が福本イズム批判をしていたから社会思想社がそれを訳したわけである。

以上のように、たしかに『社会思想』は一時期明瞭に中間派を支持し無産政党運動にコミットしたが、社会思想社すべてが中間派団体になったわけではなかった。細野、河野、三輪のように中間派政治運動の中心人物や平のように「半学半実居士」を称して社会思想社と中間派政治団体の中継を図ろうとした人々が主流をなしたのは事実だが、メンバーには学術的人物が多く実際運動には加わらない人もいたし、「27年テーゼ」を訳そうとする人物までいるという幅をもっていたわけである。

(うめだ・としひで 法政大学大原社会問題研究所兼任研究員)

(49) 前掲原資料「大会決定事項抜粋」。

(50) 『社会思想』27年2月号。

(51) 81年8月、林要氏聞き取り。

(52) 『社会思想』28年3月号。

(53) 前掲、田中氏聞き取り。